

「認知症世界の歩き方」：笈 祐介（かけい ゆうすけ） 過去の思い出とともにどんどん歩を進めたくなる街「アルキタイヒルズ」

—認知症のある人の頭の中をのぞいてみたら？—

タイムスリップをしてしまい、過去の思い出に歩を進めたくなる【アルキタイヒルズ】

《この世界には、いつの間にかタイムスリップしてしまい、過去の思い出とともにどんどん歩を進めたくなる不思議な町があります。》

小高い丘に広がる高級住宅街・アルキタイヒルズ。

不思議なことに、ここを訪れた誰もが「懐かしいなあ」という言葉を口にします。実はこの街を歩いていると、それぞれの忘れがたい思い出が次々と、ひとりで呼び起こされるのです。

懐かしい思い出に浸る時間は、なんとも心地よく、安らげるもので、ちょっとしたタイムトラベルを楽しんでいるような気分になります。

人の記憶はふとしたことで生々しく蘇り、感情や行動に強く働きかけるのですが、もし過去と現在の区別が亡くなったとしたら……？

◆ 懐かしい気分になるだけでなく、本当にタイムスリップしてしまう

- ① 『今朝、目が覚めると「おっと遅刻遅刻。早く会社に行かなければ」と思い、10年前まで務めていた会社に足が向きました。その……私はすでに会社を退職してしまっているのに、です』
- ② 『バスに乗り遅れまいと急いで歩いていたのですが、歩いている途中で結局、自分が何処に向かっていたのか、なぜ歩いているのか忘れてしまいました』

◆ 無目的に歩き回っている回っていると見える理由（認知症の方が徘徊するので困っている）

- ① ご本人は当てもなく歩いているわけではなく、家の外に出るには、必ず何らかの理由がある。
⇒ それは、仕事に行く、誰かに会いに行く、買い物に行くなど、それぞれです。
⇒ そしてその行動は、過去の思い出や習慣のに基づいていることが大半です。
- ② 10年以上前に退職していたとしても、本人の中では過去の記憶が今まさに呼び起こされているので、毎日出勤することは当たり前のことなのです。
- ③ 明確な意図を以って歩きはじめていても、途中で自分はなぜ外に出たのか、何処に向かっているのか忘れてしまうことがあります。そのため外出の理由を説明できないため、周りの人から見ると、あてもなく歩いているように見えてしまいます。

◆ 自分の家を他人の家だと思ってしまう状況と理由（自分の家に帰ろうとして外に出る）

『夜の22時を回った頃、突然「そろそろ帰らない」と思ったので、帰り支度をはじめました。帰ろうとするとその家の主人は、「ここがあなたの家でしょう！」と言って腕を掴んできた。ここは私の家ではないし、なんだか恐ろしくなっていました。その男は息子だったのですが、そのときそうは見えなかった。だって息子は、可愛くて思いやりの深い子なのに、目の前にいた男は、鬼のような顔で私を叱りつけていたのですから』

- ① 過去に住んでいた自宅の記憶が強く想起され現在の自宅の記憶にオーバーラップしてしまうため、自分の家ではないところにいる ⇒ 夜になったのだから自分の家に帰ろう、とシンプルに思ってしまう。
- ② 空間や人の顔などを認識する機能に障害が起き、その場所を自宅だと分からなくなる
- ③ 病気の進行への不安・孤独感・家族との関係が良好でないことからのストレスが「落ち着くことのできる自宅に帰りたい」という気持ちを誘発していることもある。

★ 「心身機能障害と」その障害が原因と考えられる生活の困りごと

1. 完了済みの経験や事象を現在進行中のものだと思い違える

- ① 無関係な話を長時間、何度もしてしまう ⇒ 自分の中では関係あると思って話すのだが、周りの人からは「話の流れがわからない」と言われる
- ② 退職した会社に行こうとするなど、目的無く歩き回ってしまう ⇒ 何年も前に退職したのに今でも会社へ行っていると思ってしまう。

2. 誤りや事実でないこと・事実と思い込んでしまう

- ① お金を盗まれたと思い込む ⇒ 自分で出金したのに、通帳の記録を見ても身に覚えがなく、誰かに盗まれたと思い込んでしまう。
- ② 異なる場所を自宅と思い込む ⇒ 自宅を他人の家と思い込んだり、家族を他人と思い込んだりする

3. うつ、不安状態・怒りっぽくなる

だれかが自分に対して危害を加えると思い込む ⇒ 息子のお嫁さんや近所の人が自分のことをいじめてくると思ひ込み、ひどい言葉を言ったり、避けたりしてしまう。

次回は 言葉や記号と言ったものが存在せず注文方法が常識とは異なる名店【創作ダイニングやばる亭】